

人とコンパニオン・アニマルに関する 文献レビュー —犬との関係を視野にいれて—

成城大学大学院文学研究科博士課程
コミュニケーション学専攻後期2年

松田光恵

はじめに

近年欧米を中心として、ペット（愛玩動物）という名称から、コンパニオン・アニマル（伴侶動物）という呼び名が一般的になりつつある。その言葉の意味が端的に表しているように、人間とペットとしての動物の距離が、より近いものになってきているのではないだろうか。

コンパニオン・アニマル（伴侶動物）とは、「伴侶や家族のような関係で、人間の側にいる（人間に飼育されている）動物のこと」（三省堂大辞林）である。近年では従来の“ペット”という言葉と区別して使われていることが多い。いわゆる「ペット」と呼ばれていた愛玩動物は人の生活の変化に伴い、その存在意義や役割が変化しており、飼主とペットという関係ではなく家族の一員として動物を扱おうという考えから、コンパニオン・アニマルという呼び名が近年少しずつ広まりはじめた。

総理府が発表している『動物保護に関する世論調査 <http://www8.cao.go.jp/survey/h15/h15-doubutu/index.html>』（2003）によると、ペットの飼育率は36.6%、その中でも犬を飼っている人は62.4%と最も高い。以下、猫（29.2%）、魚類（11.7%）などの順となっている。ペットとして動物を飼うことについて、よいと思うことはどのようなことか聞いたところ、「生活に潤いや安らぎが生まれる」を挙げた者の割合が54.6%と最も高く、以下、「家庭がなごやかになる」（45.2%）、「子どもたちが心豊かに育つ」（41.2%）、「防犯や留守番に役立つ」（30.2%）、「育てることが楽しい」（27.2%）などの順となっている。前回の調査結果（2000）と比較して見ると、「生活に潤いや安らぎが生まれる」（前

回 51.2%→今回 54.6%)「家庭がなごやかになる」(前回 42.5%→今回 45.2%)、「子どもたちが心豊かに育つ」(前回 40.6%→今回 41.2%)、「育てることが楽しい」(前回 24.7%→今回 27.2%)といずれの項目においてもその割合は上昇している。この結果を解釈すると、ペットを飼っている理由としては精神的、情緒的状況や安らぎ、癒しといったものを示したものが多く、またそのように回答した割合も増しているというのが現状である。何かとストレスを感じることの多い現代において、意識的、あるいは無意識的に動物の存在によって自己のストレスを回避させるための一手段、としてペット飼養が選ばれているという側面もあるのではないか。

さらに、ペット飼養としてその割合が最も高い“犬”と人間との歴史を振り返ると、古くは見張りや狩猟の手伝いをして人間と生活してきたものが、軍用犬や牧羊犬、さらにはセラピー犬や盲導犬、介助犬として、使役に駆り出され、その役割を種々こなしてきたという経緯がある。我々の身近な生活においても、ほんの数十年前までペットとしての犬は屋外の犬小屋で単なる“番犬”として飼養されているのが当たり前風景であった。しかし近代の日本においては、例えば少子化・高齢化で子供のいない家庭にあたかもその家族の役割を代替しているかの存在で犬が扱われている。また経済的にもペットに投資する余裕が生まれるなどの理由から、犬の存在とは家族の一員としてのコンパニオン・アニマルへと変貌している様相が推測される。これらのことから人のコミュニケーションや相互作用の有様が時代と共に変化し、それと共にペットと人間の関係も変化していると考えられるのではないだろうか。

人間とコンパニオン・アニマルの関係を考える上で重要なのは、1970年代に提唱された「人と動物の絆」概念である。加藤(1997)によると、「人と動物の絆」概念とは人と動物の相互から発生する精神的結びつきによって築かれる特別な関係を意味する。この概念は、人が自然と共存するためには、人と動物や自然との相互作用の重要性を認識し、お互いの福祉を考えることが重要である、という理念に基づいている。特に欧米では獣医学、精神医学、臨床心理学、動物行動学などの様々な分野で、人と動物の相互作用関係を科学的に分析し解明しようとする研究が盛んである。その研究テーマは、医療の現場で動物が人にもたらす生理的効果や心理的効果を解明することから、家庭においてペットが子供の成長過程に及ぼす影響を調査するに至るまで、多岐に及んでいる(杉田 2002、濱野 2002)。

本報告では、人とコンパニオン・アニマルに関する先行研究を、ペット研究概論、ペットが及ぼす心理的効果、ペットロスの問題、ペットと人間との関係を測る尺度、ペットが及ぼす社会的効果、といった視点からレビューし、現在のペット研究の状況を明らかにすることを目的とする。

文献レビュー

【ペット研究概論】

[A. H. キャッチャー、A. M. ベック編 (1994)]

「人と動物のきずなへの比較行動学的方法のアプローチ」:

比較行動学は自然環境内における動物の行動についての研究である。人間と動物の相互作用に関わる研究には、経験を積んだ比較行動学者がその相互作用を観察するのがよい。

「ペット犬と家族メンバーとの間の相互作用—比較行動学的研究」:

人と動物の絆について比較行動学の観点から行った研究である。人間とペットの犬との間の相互作用を研究するため、比較行動学的方法を使用した。家庭の中の家族メンバーと犬とを直接観察した。目的は、人間の行動と相互作用の形や連続の仕方、そして状況の性質を行動学的に記述すること、またこれらの記述から一般的パターンを導き出すことにある。結果、人が犬に対して注意をむけるよりも犬の方が人に対して注意を向けていた。手による接触と遊びは相互作用のタイプとしてよく見られた。手による接触は協応的な相互作用であり、犬も人も近い距離を保つため、位置の調整に協力しあっていた。遊びは大抵おもちゃを中心に行われた。考察として言えるのは、これらの行動のパターンを分析することから、人と犬の間の絆のはじまりと発達、あるいは効果についての仮説を立てる基礎となりえ、人と動物との絆の行動パラメーターを同定することで、人にコンパニオン・アニマルがいることの結果の予測や、結果の種類によっては予防や仲介をするなどの様々な可能性が考えられる。

「イヌの性格が飼い主とのきずなりに及ぼす影響」:

飼い主へのインタビューを行った。犬とその飼い主の相互作用から、ペット

動物の特性の中で人と動物の絆を形成したり維持するのに最も貢献している特別な特性を調べ出すことが目的である。結果から得られた重要な知見は、愛情と歓迎行動、注意力、表現力、敏感さの間に正の相関が見られたことである。このような行動特性は人とコンパニオン・アニマルとの絆の秘密をある程度解明する鍵となるかもしれないからである。

「動物の存在が社会的知覚に及ぼす影響」:

動物が存在することが人の印象や社会的な相互作用に及ぼす影響を客観的に実証することが目的である。TAT を元に心理学科の学生に対し実験を行った。結果、TAT 的な光景でペットや野生の動物がいる場合には、いない場合よりも絵の中の人々が肯定的に解釈される傾向があった。人々は社会的判断を形成する際に、動物との知覚された関係を利用することができる。これらの判断は事実、ある程度の根拠を持ち、少なくとも外見や衣装のような表面的てがかりに基づいた印象と同じくらい妥当である。このように動物はとりわけ都市環境において他の人々や自然界との強力な結びつきをもたらすことができる。

「動物の行動上の問題—概観」:

動物の行動上の問題点とは、自分たちやほかの人達、あるいは動物自身にとって問題であると飼い主が考えるような動物たちの行動のことである。このような問題には正常な行動の場合も異常な行動の場合もある。前者には本能的なものと学習されたものがある。後者には先天的なものやもともと病理的な障害であったものから獲得したもののほか、発達初期、またはその後の環境における経験の結果として獲得したものがある。

「人と動物のきずなの崩壊—イヌの攻撃的行動」:

ペットと人の関係をくつがえしてしまう問題行動の大部分は、攻撃、破壊性、家を汚すこと、吠えることである。この研究では最も多い問題行動とは何かを見極め、攻撃行動に対して性と品種がどのように影響しているかを発見、攻撃行動の減少にどの程度成功しているかを評価することが目的である。結果からいえることは、ペットと人の関係はペットの問題行動を正しく理解し、修正することによってかなり妨げられている、ということである。

「都市における動物」:

建て込んだ住宅や、限りのある空間のせいで、都市における飼い主は彼らの動物や社会に対して特別の責任をもつ。都市にいる飼い主は、ペット動物を選ぶときや、その世話のために時間をとるときにはこれらの責任があることを十分に理解するべきである。非飼い主の大部分にとってペットは都市環境で歓迎される存在ではないとしても、もしペットが完全に責任のある方法で管理されるなら、ペットは多くの人々にとって素晴らしいものになるし、容認することのできるものとなる。人々とコンパニオン・アニマルは、誰にとっても有益な方法で都市での経験を共有することができるのである。

「高齢者のそばに動物をおくことについて—その利益と方策」:

ペットは生活に規律を取り戻させ、確かな現実感を提供する上、世話をしたり、心配をしたり、犠牲を払ったりする繋がりのある関係や、強い情動的関係に高齢者を結びつけて、保っておくのに最適である。高齢者の場合には、コンパニオン・アニマルとの絆はおそらく人生のどの年齢の時よりも強く深いと思われる。

「高齢女性におけるペットの所有と生活充足感」:

研究の目的は①「主観的幸福感」(幸福をどのように感じ取っているか)と社会経済的地位、健康、身体的活動や社会的相互作用の関係について、報告されている全ての知見を都市以外に住む65～70歳の結婚している白人女性に適用できるかどうかの検討、②前述の人達において、ペットを所有することと、幸福をどのように感じ取っているかということとの間の関係の性質を探求することである。結果として、①ペットが家にいることと回答者の報告した幸福感の感じ方との間には関係がない、②ペットを飼うことの質的側面と幸福感との間には関係があり、ペットに愛着をもたないと答えた被験者は最も不幸福感が強く、ペットへの愛着は他の社会的愛着の指標となる、③ペットを飼うことと、幸福感との関係は社会経済的地位 (SES) によって変化し、SESの高い者はペットを飼うことがより高い幸福感と結びつき、SESの低い者はペットを飼うことが不幸福感と結びつく。

「獣医臨床における安楽死とその回避事例」:

安楽死の決断や別の方法を選ぶという問題の検討を推し進めることは、人間の精神衛生上に非常に重要な寄与をするものと考えられる。獣医師は安楽死という決定的な瞬間に立ち会い、関与する唯一の保健関係の専門家である。なくさめだけが飼い主に提供しうるすべてであるなら、それがまさに必要とされているものである、と考えられる。

「子ども時代のペットと青年期における心理社会的発達」:

ペットは青少年期の子どもの健康的な情緒や、身体の発達に大きな役割を演ずる。愛情、友好、責任の根元としてペットは子ども時代から青少年期を経て、若い大人への移り変わりを円滑にする助けをする。本研究では青少年を対象にペットに愛着をもったかどうかについて調査し、ペットとの関係におけるあらゆる質的な違いを明らかにする。特に特別治療施設にいる少年が一般の学校に通う少年と比べ、ペットとの関係において違ったものをもっていたかどうかに着目した。結果から、ペット動物は多くの少年少女達にとって非常大切であること、そして情緒障害や非行の少年少女達の生活の中では他の人間関係の代わりとなって、特別な役割を果たしていた。無条件に受容したり要求や批判をしない存在を必要としているこれら青少年の必要性を、ペットは満たしているのである。

「道徳と、人間と動物のきずな」:

コンパニオン・アニマルは非常に多くの点で人間の生活に貢献しているが、そのことは最近ようやく理解され始めたばかりであり、彼らと人間は今では驚くほど様々な面で関係があることが説明されている。人間が肉体的な健康や、精神的健康、情緒的健康、そして社会的健康を維持する上で、これらのコンパニオン・アニマルは大きな意味をもっているということが分かってきた。動物は人間にとって道具的な価値が大きいのだが、さらに彼らは動物としての本来の価値、すなわち生命を持った感覚のある道徳的存在としての価値があることを忘れてはいけない。しかし、私たちが直面しているのは道徳的に容認出来ない事態であり、法律や教育制度がこの悪循環（人間の無知から生じる動物の苦しみ、動物の権利の侵害、間違った飼育、虐待など）を破る手だてを何も講じていないのは許しがたい。そして動物の要求と権利について人々を教育する必

要があり、獣医師と動物愛護協会は先頭に立ってこの職務を果たすべきである。

「人と生き物環境—周期的時間について」:

変化と不変性を同時に認めるという二元論的な見方が私たち自身の生活に重要な影響をもっているとし唆したい。それは自然の世界に私たちを関連づける象徴的な組織に、我々が注意を払いながら、同時に、その世界と親密で注意深いやり方で関わったときだけに私たちが楽しむことのできる見方なのである。これらの影響は単に美学的なものばかりでなく、私たちの健康や情緒的なバランスにも欠くことが出来ない。我々はある意味で、その見方を復活させようともがいたり、生き物の世界に対する責任を仮定しようとしているのである。

「人とコンパニオン・アニマルとの関係についての研究の将来」:

動物と人の関係の研究分野は今や正式な科学的調査の領域として認められているが、まだ完全に独立した分野ではなく、名称や理論、そして独自の方法論をさらに発達させなければならない。この方法論では動物と人の多様な相互作用を完全に包含するようにするため、直感的アプローチと科学的アプローチの療法を使わなければならない。以下の4つの主要な研究領域が今の時点では実りが多いと思われる。①何世紀にもわたる、様々な人の文化と民族グループにおける動物の役割②動物とのつきあいが人のパーソナリティの発達に及ぼす影響③人と動物のコミュニケーション④障害者や高齢者のための正式な心理治療、施設設備、住宅整備における動物の治療的利用、などが今後の研究で発展するだろう。

[桜井、長田 (2003)]

「ヒューマン・アニマル・ボンド (HAB) 研究とは」:

HAB (Human Animal Bond) 研究 (1970年代に始まる) は、人類学、動物行動学、獣医学、心理学、社会学、宗教学、などの様々な分野から研究されている。研究の始まりは「なぜそんなに多くのペットを飼うのか」などの点が広く欧米で話題となり、上記の諸分野からの研究が展開されるようになった。1970年代にペットに関わる諸論文を検討する第1回「Meeting of group for the study of human companion animal bond」が心理学者、精神医学者、獣医

師、社会学者らによって 1979 年 3 月にスコットランドのダンディーで開催（ダンディー・ミーティング）され、そこで初めて「Human Animal Bond (HAB)」という名称が用いられた。1990 年には「International Association of Human-Animal Interaction Organizations (IAHAIO アイオハイオ 人と動物との相互作用国際学会)」が創設され、IAHAIO は世界各国で 3 年に 1 度、「International Conference on Human-Animal Interactions (人と動物の関係に関する国際会議)」を開催している。(第 1 回大会は IAHAIO の前身的な組織の運営により 1977 年にロンドンで開催された。)

欧米における初期の HAB 研究は 1970 年初頭の臨床心理学者、レビンソンによる「ペット飼育が身体障害者や精神遅延児に円滑な対人関係を形成するのに有効である」、とした研究、1975 年コーソンの「精神病院での動物療法の研究」、1975 年マグフォードとマッコミスキーの「ペット飼育が他者とのコミュニケーションを増加させる社会的潤滑剤として機能することを明らかにした研究」、などが代表的なものである。1970 年代前—中期にかけての研究は動物飼育の持つ「社会的効果」や「個人に役割やアイデンティティを与える機能」が疾病治療に利用できる、としたものが多いことに、その時期の特徴がある。1979 年以降は動物飼育が健常者の well-being に及ぼす役割を検討した研究が飛躍的に増加する。1980 年以降は「人の健康に及ぼす生理的効果」に関する研究が数多くなされ、心臓病や高血圧の対策としペット飼養の有用性が報告された。「人の健康に果たすペットの役割」としては犬などの小動物の存在が、高齢者や障害者などにとって、健康面での改善に貢献する役割を果たすことを示した研究が多くなされた。

また、日本において“アニマル・セラピー”と呼ばれているものは、アメリカにおいては以下のように区別し、定義されている。「動物介在療法 (Animal Assisted Therapy: AAT)；人の治療目的のために設定されており、あらゆる治療場面の主導権は医師、看護師、理学療法士、作業療法士などであり、治療目標の設定、治療計画の作成、具体的な治療の実施が、全て人間の医療の専門家主導でおこなわれる」と「動物介在活動 (Animal Assisted Activity: AAA)；動物とのふれあいを目的に行う活動で、医師の直接関与を伴わず、治療戦略や医療従事者の治療計画は原則として必要としない」、の 2 つである。

日本における HAB 研究は 1989 年前後に始まった。欧米の HAB 活動の議論の中心はすでに AAT の活用方法や有効性ではなく、実施段階に必要な要素

の検討に移っている。しかし日本においては AAT の活動報告や有効性を訴えるものが大半であり、この分野では遅れを示している。1998 年以降、ペット飼育が中高年の精神健康に及ぼす影響を調べ、ペットとの情緒的一体感の強い者ほど抑鬱状態が弱くなる傾向を明らかにした研究や、犬を擬人化したり自らを幼児化した発話分析の研究など、新たな分野でも HAB 領域の研究が進んでおり、今後の HAB 研究発展にとって大きな意味を持つものと思われる。

「人と動物の関係、がもたらす多くのもの」:

動物の持つ多彩な能力、阪神淡路大震災に見る人と動物の関係、「動物飼育実態調査」から見る子供の心の発達、ペットロス、といった視点から論じている。

「アニマル・セラピーの現場から」:

ペットが、子どもや高齢者、ストレスなど人の健康に果たす役割、アニマル・セラピーの概要や実際の症例、を示している。

「人と動物の関係、を科学的に解明する試み」:

行動観察とは、個体や個人の行動を正確に記録し、客観的な方法を用いて分類し、得られたデータを定性的、定量的に扱う研究方法であるが、現在の HAB 研究では、質問紙調査法などが多く用いられており、行動観察法が用いられることは少ない。しかし行動観察法とは人と動物の関わりを明らかにする上で役立つ方法であると考えられる。今後の HAB 研究においてこの行動観察法は非常に有用な手段であると考えられ、その特徴と実施の仕方、また行動観察法の代表的なものには連続記録法、時間サンプリング法、行動連鎖などがあるが、その行動の分析方法を解説する。

さらに、人間の社会的支援研究の視点からコンパニオン・アニマルと人間の絆 (HAB) を考えると、その概念はコンパニオンシップとソーシャル・サポートに相当すると考えられ、よって HAB 尺度の作成を試みた。予備調査のデータを基に因子分析した結果、第 1 因子「ペットといると気持ちが落ち着く」「ペットといると安心する」という項目から「ペットからの情緒的サポート」という結果が出た。第 2 因子は「ペットは自分を必要としてくれる」「ペット

に自分は信頼されている」という項目から「ペットからの信頼」という結果が出た。第3因子は「ペットに触ったり、撫でたりする」「ペットと一緒に遊ぶ」という項目から「ペットとの交流」という結果が出た。つまり「ペットからの情緒的サポート」、「ペットからの信頼」「ペットとの交流」、の3側面を測定する HAB 尺度は、得点が高ければペットからのサポートや信頼を得ている、ということの意味する。

その他、人と人をつなぐ存在としてのペットの社会関係促進効果についての研究もあるが、その重要性にも関わらず、これまであまり取り上げられてこなかった。飼い主やペットの幸福について考える際にはその両者の間の関係だけにとどまらず、それを取り巻くより広い社会のなかの人々との関係全体を視野に入れて議論する事が必要である。

【心理的効果】

【諸井 (1984)】

人の孤独感については、UCLA 孤独感尺度 (Russell et al. 1978) を用いて行われた先行研究から、高孤独者の社会的行動の特徴は以下のように指摘されている。自己の対人関係上の問題として社交性の抑圧、自己開示傾向が低い、自尊心が低い、他者をネガティブに評価し、他者も自己をネガティブに評価することを期待する、社会的比較の回避傾向がある、人気がなく友人のうちで最も親しい間柄にある者とも親密さの程度が低い、相互作用時にパートナーへの注意が少ない、といったことが挙げられる。すなわち、孤独感とは社会的接合の要求水準と達成水準との間のズレの状態であるばかりでなく、対人的不適応と深く関係していると考えられる。

Levinson (1962) はペットの心理学的重要性を指摘し、ペット・セラピーを提唱した。また、ペットとの愛情溢れる相互作用がもたらす心理学的効果は教育場面に活用できるとする研究もある。Levinson の考えからは、社会的関係上の不適応がもたらす孤独感をペットの相互作用を通して癒すという拡大仮説に一致できると考えられる。

Templer (1981) は、ペットに対する態度を測定する尺度を開発したが、もしその拡大仮説が正しければ、その尺度から得られるペットに対する態度と孤独感の間には正の関係が見られるはずである。

本研究の目的はペット尺度を検討し、UCLA 孤独感尺度との関係を調べることであり、すなわち孤独とペットへの態度間との関係を調査することである。

その調査の結果、生じた孤独感は、人間に対してばかりでなくペットに対するネガティブな態度を伴い、その一方で、ペットへの補償的接近の動機付けを喚起することを示した。しかし人間関係に本来的には由来している孤独感とペットとの相互作用とがどのように関係するかはサンプルの拡大や追跡調査によって明確にする必要がある。

[濱野 (2002)]

家庭内でコンパニオン・アニマルとして飼育されている犬と飼い主の情緒的な関係を多側面から捉えることのできる尺度を作成することを目的とする。作成にあたり予備調査を行い、犬を飼育している飼い主 24 名に半構造化面接を行った。面接の質問項目は「人とコンパニオン・アニマルの関係を測る尺度」([Pet Attitude Scale (ペットに対する態度測定尺度) : PAS] [Companion Animal Bonding Scale (人とペットとの関係測定尺度) : CABS] [Pet-attachment Index (ペットに対する愛着測定尺度) : PAI] [Pet Relationship Scale (ペットに対する態度とペットとの関係測定尺度) : PRS] [Lexington Attachment to Pets Scale (ペットに対する愛着測定尺度) : LAPS] [Comfort from Companion Animal Scale (飼い主がペットから受けた情緒的な快適さ測定尺度) : CCAS]) を基に作成した。

先行研究による尺度、予備調査の結果を踏まえ、本調査では犬の飼い主 364 名に対し質問紙調査を行う。結果を因子分析したところ、34 項目 6 因子となる、人とコンパニオン・アニマル (犬) の愛着尺度が作成された。6 因子は、①日常生活における犬との快適な交流、②情緒的サポート役割、③社会的相互作用促進役割、④家庭内ボンド役割、⑤受容役割、⑥養護性促進役割、となった。これより人にとってコンパニオン・アニマル (犬) は、家庭内において、情緒的に様々な役割を担っていることが示唆された。

その結果から、飼い主にとって犬の存在とはどのような役割を担うか、を以下の 4 点と捉えた。①犬の存在が、ストレスの軽減や気分の落ち着きをもたらすような、飼い主の情緒的な安全基地の役割として機能しており、犬は自分を無条件に受け入れてくれる存在と捉えていた。②飼い主は犬を家族の一員として捉え、家族の共通の話題を増やしたり、雰囲気を楽しんだり、争い事を緩

衝する役割をしていると捉えていた。③飼い主は犬の存在は世代を越えた他者との関わりを媒介する役割があると捉えていた。④飼い主は犬をケアしてあげる存在と認識し、必要とされているという存在感を満たすことができる、他の家族と違い養護してあげる存在として捉えていた。

[金子 (2003)]

近年の日本においては家族の一員としてペットを飼う家庭が増えてきており、ペットの家族化が進んでいるといえる。そこでペットは家族の一員であり、飼い主の情緒を安定させる効果があると予想して、ペットの飼育状況やペットに対する認識、癒し効果や孤独感の低減といった心理的影響の有無を検討する。

女子大生 165 名を対象に、①ペットの飼育状況とペットに対する認識②ペットによる“癒し”の効果③UCLA 孤独感尺度、に関してアンケート調査を行った。

結果から、ペットによる“癒し”を検討したところ、ペットは家族の一員で心が通じ合えると認識され、緊張感が和らぎ鎮静作用をもたらすことがわかった。ペットの仕草は見ていただけで心がなごみ、生き物としての温かさや柔らかさはペットの癒し効果の大きな要因であろう。ペットは飼い主を無条件で受け入れる存在であり、受容される心地よさを感じると共に、自己の存在価値を高めるとも考えられる。またさらにペットを媒介として他者とのコミュニケーションが良好になることも考えられる。

次に孤独感について、飼育経験者は非経験者よりも孤独感は低いが、飼育経験者の中に現在ペットを飼っていない人も含まれることを考えると、子どもの頃の飼育経験が青年期以降にどのような影響をもたらしているかを検討する必要がある。

マイナス面としては、ペットロス症候群やペットから人への感染症の問題も挙げられる。またペットと人との距離感が縮まるにつれペットを人間社会に適応させる必要がある。マナーの遵守など、社会的な良識を持ちながらのペットとの共同生活が望まれる。

[ペットロス]

[新島 (2001)]

本研究では、ペットに関するリアリティのずれという観点から元飼い主のペットロスのつらさを捉えなおし、周囲との人間関係においてつらさがどのように生起・強化されているのかを相互作用論を用いて、ペット喪失体験者への聞き取り調査の事例から検討している。

飼っていたペットと死別・離別することによって引き起こされる深い悲しみのことをペットロスというが、十分に研究されていないのが現状である。先行研究においては、ペットロスを元飼い主の愛着から生じる飼い主とペットの関係に焦点をあてた二者関係論から説明したものや、飼い主、ペット、その周囲の第三者に焦点をあてた三者関係論から説明したものもある。これはつらさの要因は、人間とは違うペットを哀悼しない文化背景のためだと前提されてきたが、周囲の人々と元飼い主との間で実際につらさが生起・強化されるプロセスが論じられていない。

実際の聞き取り調査からは、ペットロスのつらさは、ペットと飼い主の二者関係での愛情によるつらさのみならず、ペットに付与するリアリティが周囲の人々のそれと分離し、封殺されることで強化されていた。つらさの生起・強化過程をとらえるには、二者関係論だけではなく、三者関係論的な視点が不可欠である。つらさがどのように自己—他者関係、自己—自己関係で重層するかを検討した。

さらに、ペット哀悼の文化を相互作用場面の成員が共有していたとしても、哀悼の方法を巡り、リアリティ分離が生じている場合は実際にはつらさが生起し、強化されていた。さらに実際の飼い主—ペット関係において各人の有するペットのリアリティは、所有や消費の対象といったモノ視、擬人化などの既存の枠組みでは捉えきれぬほど多様化していることが示唆された。

[柴田 (2003)]

日本におけるアニマル・セラピーの実態やその実態について述べており、アニマル・セラピーについて、アニマル・セラピーの利点や効果、実際の活動、問題点と日本の現状、海外との比較、などについて述べている。アニマル・セラピーの問題点を以下5点として述べている。1つ目に、動物に対する日本人

の意識のあり方である。昔の日本では犬は番犬であり外飼いが常であったため、汚い、煩わしい、犬は外で飼うもの、といった固定観念がある。これらは高年齢層に特に顕著な意識である。老人ホームなどでのアニマル・セラピーではこの点が問題になるであろう。2つ目に、アニマル・セラピーの適応症状が多種多様であるために単一のモデルを示しづらく、セラピーの効果を科学的に立証した研究例が少ない。3つ目に、動物に対する間違っただ認識からおこる安易なアニマル・セラピーになりがちなところである。4つ目に、セラピー犬にかかるストレスである。ストレス下の動物では効果的な治療を行えないので、動物から発するカーミングシグナル（犬のボディランゲージ）を治療従事者が認識してセラピーをおこなうべきである。5つ目に、日本の行政体制である。現状の日本においてはアニマル・セラピーを実施する団体をサポートする体制に乏しく、セラピストを育成する教育機関が少ない。医療としてのアニマル・セラピーの効果を十分に引き出すにはこれらの体制を整える必要がある、などとしている。

さらに、アニマル・セラピーを日本と欧米で比較すると非常に遅れをとっているのが現状であり、日本においては「レクリエーション的」「イベント的」なアニマル・セラピーに終わってしまう場面が多い。目的を持った効果を出す医療としてのアニマル・セラピーが望まれる。

【ペット尺度】

[安藤 (1999a, 1999b)]

ヒューマンアニマルボンドの研究が進展する上で、人と動物との関係を量的に把握することが急務になっている。安藤 (1999) は国外の人と動物の研究を元に、人とペットの関係を評価する 6 尺度を紹介している。

1: 「Pet Attitude Scale (ペットに対する態度測定尺度): PAS」

PAS とは、Templer (1981) によって開発された、ペットに対する態度を測定する自記式の尺度である。彼らは人とペットの愛情豊かな関係を量的に把握した研究を行うため、ペットに対する好意的な態度を測定する尺度を開発した。質問項目は「私はペットがエサを喜んで食べるのを見るのがたいへん好きである」「私にとっては、ペットは友達以上に大切なものである」等の 18 項目から

なる。また Templer らは、PAS の内的構造を検討するため因子分析を行っており、その結果第 1 因子として「ペットに対する愛情とペットとの交流」、第 2 因子として「家庭でのペット飼育」、第 3 因子として「ペット飼育の喜び」、の 3 因子が見いだされた。この分析結果から PAS は多次元的な構造を有するものと仮定される。

2: 「Companion Animal Bonding Scale (人とペットとの関係測定尺度): CABS」

CABS とは、Poresky (1987) らによって開発された人とペットとの関係を測定する自記式の尺度である。彼らは人とペットの日常生活における具体的な行動から、人とペットの絆を量的に把握することを試みた。これは人と動物の間で形成される情緒的な絆を測定するものである。質問項目は「あなたにはどのくらいコンパニオン・アニマルの世話に責任がありますか」「あなたはどのくらいコンパニオン・アニマルをきれいにしていますか」等の 8 項目からなる。CABS には質問項目が現在時制で書かれ現在のペットとの関係を測定するものと、過去時制で書かれ回答者が幼少時に接したペットとに関して回想的に回答し、幼少時のペットとの関係を測定するものがある。

3: 「Pet-attachment Index (ペットに対する愛着測定尺度): PAI」

PAI とは、Stallones (1988) らによって開発された、ペットに対する愛着を測定する自記式の尺度である。彼らは従来の知見ではペットの種類に着目した分析には不適切であると考え、ペットからの情緒的なサポートなどに関連した文献を基に PAI を開発した。質問項目は「あなたはペットを友人とみなしていますか」「あなたはペットに話かけますか」等の 6 項目からなる。

4: 「Pet Relationship Scale (ペットに対する態度とペットとの関係測定尺度): PRS」

PRS とは、Lago (1988) らによって開発されたペットに対する態度とペットとの関係を測定する自記式の尺度である。彼らは、Pet Attitude Scale や人と動物に関する既存の文献から得た項目から原案を作成し、予備データを作り、それらについて因子分析を行った。その結果、第 1 因子として「愛情豊かな交流」第 2 因子として「家族との対等性」第 3 因子として「相互の身体的活動」、

の3因子が見いだされた。質問項目は「私は、ペットがいなければ、さびしいだろうと思うことがある」「私は、私を悩ませることについてペットに話しかける」等の22項目からなる。

5: 「Lexington Attachment to Pets Scale (ペットに対する愛着測定尺度): LAPS」

LAPSとは、Johnson (1992)らによって開発されたペットに対する愛着を測定する自記式の尺度である。彼らは既存のペットに対する愛着尺度は信頼性や妥当性を十分に検討したものではない、と考えLAPSを開発した。作成にあたり、以前から問題点として指摘されていたペットに対する弱い愛着をも測定出来るように考慮している。また、内的構造を検討するために因子分析を行った。その結果、第1因子として「一般的な愛着」第2因子として「人の代理としてのペット」第3因子として「動物の権利福祉」、の3因子が見いだされた。質問項目は「私にとっては、ペットは友達以上に大切なものである」「私はいつもペットを信頼している」等の23項目からなる。

6: 「Comfort from Companion Animal Scale (飼い主がペットから受けた情緒的な快適さ測定尺度): CCAS」

CCASとは、Zasloff (1996)らによって開発された飼い主がペットから受けた情緒的な快適さを測定する自記式の尺度である。彼らは既存の尺度では、人と犬や猫との間にみられる交流のみに着目したものだとして、愛情、信頼、忠誠心、互いに楽しめる活動というような人があらゆる種類のペットと結ぶ関係性の情緒的側面については重要視されてこなかった、と考えた。そこで、人と動物との交流に見られる行動のみではなく、その関係性における情緒的側面に注目した尺度は必要である、とした。質問項目は「ペットは私に親密な関係を与えてくれる」「ペットを飼うことで、何か保護するものが私に与えられる」等の13項目からなる。

【社会的効果】

【杉田 (1999)】

本研究では動物介在療法を取り上げ、その結果をまとめると共になぜ動物が

人に精神的・身体的健康をもたらすのか、なぜ人がコミュニケーションの相手に動物を求めるのか、についてコミュニケーション概念を基に仮説を立て、論じていく。

[人と動物の絆と動物介在療法]：

人と動物の関わり合いの歴史は長く、犬にいたっては家畜化されたのは1万2千年以上前だといわれている。犬の役割は、見張り番や狩猟の手助けなどから近年では闘犬、軍用犬、ショー・ドッグ、牧羊犬、盲導犬、聴導犬、災害救助犬、などと、時代と共に、その役割も多様化してきている。その長い歴史の中で犬は人間とゆるぎない精神的結びつきを強固にしてきた。このような、人と動物との相互作用関係に基づく結びつきは「人と動物の絆 (Human-Animal Bond)」と呼ばれている。「人と動物の絆」の定義は、Gammonley (1991)によると以下のようになる。「ヒューマン・アニマルボンドとは、人が動物に対して精神的結びつきを強く感じた場合に発展する、特別な関係と定義できる」(筆者訳)。「人と動物の絆」の理念は、人と動物、自然との相互作用関係の重要性を認識し、お互いの福祉を考えていくことが必要だというものである。またその後、人と動物の関係をより詳しく明らかにしようとする研究がアメリカを中心に発展していった。ここからは、動物とふれあうことが人間にとって精神的、肉体的にも良い影響をもたらすということが明らかになった。これらが礎となり、動物がボランティア活動や医療の現場に介入されていくようになり、動物介在療法 (Animal Assisted Therapy: AAT) と動物介在活動 (Animal Assisted Activity: AAA) が生まれた。動物介在療法は、まず動物と治療を受ける者が相互作用関係を形成し、次に治療を行う者と受ける者との間に相互作用関係が生じる、というプロセスが確認できる。動物介在活動には大きく分けて6通りの方法がある。施設訪問型、施設飼育型。在宅訪問型、在宅飼育型、屋外活動型、心理治療の倍に動物を導入する方法、がそれである。

[動物が人にもたらす効果]：

動物が人に及ぼす効果は主に「生理的効果」「心理的効果」「社会的効果」に分類される。「生理的効果」の具体例は心筋梗塞と狭心症の患者を対象に患者の1年後の生存率とペットの所有を調べたものがある (Fried et al. 1980)。その結果ペットを飼っていた患者の方が飼ってなかった患者よりも生存率が高か

ったことが明らかになった。また、子犬や仔猫と接すると血圧低下や不安や緊張が和らざりリラックスするという研究結果も出ている。さらに、アルツハイマー症候群の患者に動物が及ぼす影響を調べた研究もあり (Fritz et al. 1995)、その結果は動物と触れあった患者はそうでない患者よりも非認識行動の発症率が低く、不安や言語による攻撃性、異常な活動性が起こる率も低い、とすることが報告されている。

次に「心理的效果」とは動物との接触が人のネガティブな心理的側面を減じ、精神的健康度を高める効果を言う。先行研究からは精神病患者や躁鬱病患者に犬を使った動物介在療法を行った場合、通常の治療よりも効果があがっていたという結果がでたり、犯罪歴のある精神障害者収容病院で囚人に小動物を飼えるような報酬システムを導入した場合、囚人間の暴力や喧嘩が減り、自殺者がいなくなった、という結果が出た。また老人ホームで動物介在療法を行った場合、何年外に出なかつた老人達が犬を迎えに外に出るようになったり、犬が来るのを待ちわびるようになった。さらに住人同士の争いごとが無くなり、雰囲気はよくなつたり、寝たきりや歩くことの出来なかつた老人が犬の世話をするために健康を回復するようになった、との結果が出た。

最期に「社会的効果」とは動物の存在が周囲の人との相互作用を促進し、人間関係を広げる効果があることを意味する。Fick (1992) は老人ホームの住民に対し治療を行い、犬がいた方が被験者の会話の量が著しく増えたという結果を得た。Hart et al (1987) は動物を連れてくる人の方が他者との接触の機会が増えることを立証している。このように、動物は人々に共通の話題を提供し、少なくとも動物に興味のある人同士の精神的距離を縮めることができる。

これら「生理的效果」「心理的效果」「社会的効果」は単独に作用するのではなく相互に関連しあっている。動物が人に及ぼす3つの効果は複合的に現れ、その結果単一では達成できないような大きな効果を上げている。

[人と動物のコミュニケーション]:

動物が相手だと、人のコミュニケーション行動を規定する **inclusion need**、**control need**、**affection need** といった3つのコミュニケーション欲求が満たされる。

inclusion need を満たすのは、動物は社会的地位や学歴、人種などといったものに影響なく好意を示してくれ、黙って話を聞いてくれる存在であり、人は

自分が受け入れられていると感じられ、コンプレックスやストレスを感じないで自分の感情や考えを表現できる、といったことである。その結果、自分と動物はお互いに受け入れた親しい関係を形成していると認識し、精神的疎外感や孤独感を癒すことに繋がると考えられる。

control need は、人が動物に対して世話をし、飼育しているという支配的な立場から認識することができる。

affection need は、動物は人を裏切ることなくいつも変わらぬ愛情を示し、人の社会的条件などに関わらず、無償の愛を受け取る対象である、ということがこの欲求を満たすと考えられる。

これら3つの要求を満たすことは人が自信や自尊心を快復することにもつながり、結果、動物との触れ合いが人の精神的・肉体的健康を引き出す結果である、と考えられる。

[杉田 (2002)]

欧米や日本で行われた調査結果からは、ペットが「子ども」として認識されており、子どもの有無や同居している子どもの年齢がペットに対する愛着度に影響する可能性を呈示している。仮説を「同居している子どもの年齢が高い、子どもと別居している、あるいは子どものいない飼育者ではペットに対する愛着度は高いが、同居している子どもがおり、その年齢が低い飼育者ではペットに対する愛着度は低い」とし、検証した。

男性と女性ではペットに対する愛着度とペットと過ごす時間に差が見られる(女性の方が高い)。子どもを持つ女性で、子どもの年齢が低いよりも、高い、または子どもが自立してしまった方がペットへの愛着度は高くなる傾向にあり、仮説を支持している。女性にとってペットが「幼い子ども」に代わる存在であることを示唆している。

つまり、同居している子供の有無と年齢がペットに対する愛着度とペットと過ごす時間に及ぼす影響を調査し、ペットの子どもとしての存在性について検証を行った。結果、男性と女性ではペットと過ごす時間に差が見られること、同居している子どもの有無と年齢がペットに対する愛着度に影響を及ぼすこと、女性では同居している子どもの有無と年齢がペットと過ごす時間に影響を及ぼすが、男性では影響を及ぼさない、ということが明らかになった。男性と比べ、女性の方がペットに対する愛情を強く抱いており、子どもをもつ女性よ

りも子どものいない女性の方が同じく愛情が強いことが判明した。男性はこれに当てはまらず、このことから、女性にとってペットとは子どもの役割を担っていることが示唆された。

[杉田 (2002a)]

欧米では、人と動物の関係を科学的に分析しようとする研究が多く行われている。これらの中には、ペットの飼育という観点から、ペットが人の健康に及ぼす影響について論じたものが多いが、その見解は一致していない。本調査では JGSS-2000、JGSS-2001 のデータに基づき、ペットの存在が日本人の健康に与える影響を説明することを目的。対象は犬である。

Research Question 1:「犬を飼うことは日本人の身体健康及び精神的健康に影響を及ぼすのか。」 **Research Question 2:**「犬に対する愛着の強さは飼い主の身体健康及び精神的健康に影響を及ぼすのか。」

結果、RQ1 に関して、犬を飼うことは身体健康に影響を及ぼさない。犬を飼うことは男性の精神的健康に影響を及ぼさないが、女性の精神的健康を高める。すなわち、犬を飼っていない女性に比べて、犬を飼っている女性の方が精神的に健康である。RQ2 に関して、犬に対する愛着の強さは飼い主の身体健康には影響を及ぼさない。犬に対する愛着の強さは飼い主の精神的健康を高める。すなわち、犬に対する愛着が弱い飼い主に比べて、犬に対する愛着が強い飼い主の方が精神的に健康である。

つまりデータ分析の結果をまとめると、「犬を飼うことは日本人の身体健康及び精神的健康に影響を及ぼすのか。」という問題については、犬を飼うことは身体健康に影響しないこと、犬を飼うことは男性の精神的健康に影響しないが、女性の精神的健康を高める。すなわち、犬を飼っていない女性に比べ、犬を飼っている女性の方が精神的に健康である、ということが示唆された。さらに「犬に対する愛着の強さは飼い主の身体健康及び精神的健康に影響を及ぼすのか。」という問題については、犬に対する愛着の強さは飼い主の身体健康に影響しないが、精神的健康を高めることが明らかになった。犬に対する愛着が弱い飼い主に比べて、犬に対する愛着が強い飼い主の方が精神的に健康である、という結果がでた。

これらの結果からは、犬を飼うことは必ずしも日本人の健康を高める効果があるわけではないということ、さらに日本人の健康の向上には飼い主の性別や

犬に対する愛着の強さなどの要因が関係している、ということが考えられる。

[金児、金 (2004)]

近年の日本においてのコンパニオン・アニマルの所有率は3割を越えている。この現象は少子高齢化・核家族化を背景に今後益々増加することは予想されている。その背景にはこれまで人間が果たしてきたソーシャル・サポートの役割をコンパニオン・アニマルが代替できるのではないかと、という期待である。欧米の先行研究によれば、ペットは人に安心感をもたらし、ストレスを軽減するなどの心理的効果を持っている。しかし日本では欧米とは異なり、ペットの所有あるいはペットの愛着が必ずしも飼い主の幸福感に繋がっていない場合があり、さらに周囲の人々との関係の発展・意地を阻害する可能性もある。

そこで本研究ではペットの飼い主の対人関係の発展・意地の阻害要因について、飼い主のペットへの愛着のあり方が欧米のそれとは異なり、盲目的あるいは依存的であるためとの仮説を検証することを目的とする。①ペットへの盲目的・依存的な関係が対人ネットワークへの関心の減少を引き起こす結果、結果的に対人的な交流・サポートが減少してしまうプロセス②盲目的な愛着がペットへの躰を甘くするため、その結果として周囲の人々からの拒否が生み出されてしまうプロセス、の存在を検討した。

40歳以上の男女、803人に対して質問紙調査を行った。検討した項目は①ペットとの愛着関係②ペットに対する躰の程度③人間関係志向性④散歩時に他者と交わす会話⑤ペットを介した対人ネットワーク、の5点である。

その結果、「ペットとの愛着関係」については因子分析の結果、2因子が抽出された。第1因子は「ペットの世話に対する責任をもちつつもペットから安らぎを得るといふ健全な関係」であり、「健全な愛着」とした。第2因子は「ペットを親しい人間の代わりともみなしかつペットに精神的にコントロールされるような関係」であり、「依存的愛着」とした。

「愛着タイプと社会的交流との関連」についてはペットへの愛着が人間関係志向性や対人的交流に及ぼす影響を検討するため、人間関係志向性、散歩時の会話、ペットを介した対人ネットワーク、友人からのサポートの認知、を従属変数、健全な愛着、依存的愛着、性別、年齢、経済状態、健康状態を独立変数として重回帰分析を行った。その結果、依存的愛着は人間関係志向性と関連はないが、ペットを介した対人ネットワークは依存的愛着が高いほど多いことが

示された。また散歩時の会話、友人からのサポート認知は健全的愛着が高いほど多く、依存的愛着との関連は見られなかった。このことから、依存的愛着が強いほどペットを介した対人ネットワークは多くなるがそれは友人からのサポート認知には繋がらないことが示された。

「ペットの躰と非飼い主のペット飼い主への態度」については、飼い主のペットへの愛着関係とペットに対する躰の程度との関連を検討した結果、依存的愛着の程度が高いほど躰をしていないことが示された。さらに女性のみでマナーの良くない飼い主が多い、と認知しているほどペット飼い主への話しかけが少ないことが明らかになった。これらのことから、依存的愛着が強いためにペットに対して躰が甘くなり、それが非飼い主からネガティブな反応を引き起こす結果、ペットを飼っていない人とのネットワークの形成が阻害されてしまう、というプロセスの存在が示唆された。

分析の結果、ペットとの依存的な関係が強いほど対人的な交流が少ない、ということはなかった。特にペットを介したネットワーク人数は依存的愛着が強いほど多かった。しかしこうした依存的愛着がもたらす交流はサポートを受けているとの認知につながっていないこと、また依存的愛着がペットの躰を甘いものにするため、その結果非所有者からの拒否が生み出されてしまうプロセスの存在が示唆された。

[山田 (2004)]

人とペットの関わりあいは、近年、様相が変化してきている。近年のペットブームが昔のそれと大きく違うのは、飼い主のペットに対する態度が変化していることが特徴である。例えば、以前は番犬や子どもの遊び相手としてとりあえず交っておけばいい、という飼い方が多かったが、今はペットと心の交流を楽しむ人が増えており、また無添加のペットフードやサプリメントを与えたり、ペットの健康に気を配り、より長く生きて欲しいをいう願いが強まっている。また、ペットの気持ちを気にする人が多いのも特徴であり、ペットが喜んだり、悲しんだりする感情に反応して、ペットにも満足してほしい気持ちが高まっている。変わったのは“人の態度”である。

そして、ペットをかわいがったり、訓練したり、ペットの気持ちを知らうとする人が増えてきており、家族としてペットを扱う傾向にある。これらは、ヨーロッパで 1700 年頃に現れた、子供を可愛がったり意識的に教育し気持ちを

慮ろうとする親の意識の出現と同じものだと思われる。このような意識の広まりは、家族論における“家族の近代化”であるが、それとともに「子ども期」と言う概念ができあがる。何よりも自分の子どもを愛情持って育てることを中心に捉えた家族が誕生するのである。そしてペットと人間の間で家族の近代化のようなプロセスが起こっており、まさに「家族ペット」が誕生していると考えられるのである。

さらに、現代人は「かけがえのなさ」や「自分らしさ」を求めている。家族とは、自分を自分として見てくれ、自分であることを識別してくれる存在である。そして相手から自分が必要不可欠な存在だと認識される、そういった関係を結びたいという欲求が人には備わっている。言い換えればそれはお互いにとってかけがえの無い存在であり、人々が犠牲を払っても得たいのはその「かけがえのなさ」である。しかし近代社会においては家族が「代わりのきかない長期的に信頼できる関係」であるとは信じられなくなっているのが現実である。また、現代は人間同士で自分らしくふるまえる信頼関係を築くのは極めて難しい時代だといえる。「かけがえのなさ」や「自分らしさ」は今の人間の家族に求めることが難しくなっている。しかしペットは自分から裏切ったり、別れたりしない。そこでペットの存在が家族以上に家族らしい存在として浮かび上がってくる、と考えられるのである。

さらに今のペットブームは単なる流行で片づけられる現象ではなく、ペットを家族とみなす人々は今後も増えると思われる。そこには社会の構造的な要因が存在しており、それを外在的要因と内在的要因から説明できる。

まず外在的要因としては、現代日本の家族状況をあげることができる。人間が家族を持ちたいと望む欲求は基本的なものであるが、今は現実の人間に対してそれを求めてもなかなか満たせない状況が出現している。相手への欲求水準の高まりにより未婚化が進展しており、離婚率も増大している、といった状況から今後独身者が益々増加していくという予測が立つ。または高齢化に伴う、老人の一人暮らし、家庭内離婚のように、家族がいても心理的には一人、という関係も増えてくるだろう。そうすると、かけがえのない関係や自分らしくある関係を求める欲求は強まる一方であるのに、既存の人間関係では埋めることができない。それに応える存在として現れるのが家族ペットである。一人暮らし、または心理的な一人暮らしをせざる得ない日本家族の要因が、外在的要因としてペットブームを支えているといえる。

またペットブームの主流にいるのは小動物であるが、これら小動物が「人間の子どもを連想させる」ことと「適度な手間をかける必要がある存在」であることに、内在的要因がある。「人間の子どもを連想させる」理由としては、小動物は人間の赤ちゃんのように抱けて温かい、言葉はしゃべれないが喜怒哀楽を表す、などペットと赤ちゃんには共通点も多いことが挙げられる。そのことから小動物は子どもを連想させ、子どもがわりとして扱うのに最適な存在である。さらにこれら小動物は飼い主と他の人を識別できる。また飼い主から見てもペットの個性がわかり、自分のペットが認識できること、すなわち取り替えがきかない、という点が人間の子どもと共通する。次に「適度な手間をかける必要がある存在」理由としては、人間の子どもや赤ちゃんはペットの世話に比べて遙かに負担が大きいのだが、ペットは自分がいなければ生きられない、と思える程度の手間がかかる点が重要なのである。“自分が世話をしなければこのペットは死んでしまう”と思える、このかけがえなさを伴う感覚が小動物を飼う負担の中にあり、これら感情が生起する中でペットを家族とみなす土壌が培われていくと考えられる。

これら外在的要因、内在的要因からみても小動物は家族とみなしやすく、これらのペットを家族として生活する人々は今後も益々増えていくものと考えられる。

おわりに

上述したように、人とコンパニオン・アニマルに関する研究は多くのアプローチが考えられ、様々な分野にまたがって相互に関連を持ちながら研究が行われている。ざっと取り出しただけでも、ペットと人間の関係評価尺度の開発、人と動物のコミュニケーション、ペット飼い主の健康問題、ペット喪失体験、ペットのセラピー効果、家族としてのペット、などであった。また、主たるものを学問領域から考えてみると、医学、心理学、社会学、獣医学、動物行動学、あるいは教育、法律、新しくはペット型ロボットなどによるロボット工学の分野などが挙げられると考えられる。

また近年、日本においてはペットブームが興隆しており、経済や人同士のコミュニケーションにも影響を与えている。ペット産業は今や一兆円を超える規模にまで成長した不況知らずのマーケットであるが、そこからは多大なる経済

的波及効果が生まれている。またペットを介することで人同士のコミュニケーション・ネットワークが拡大する、などといったある一定の社会的効果を排出している。さらにペットに関するマナーの問題、盲導犬や聴導犬、介助犬といった使役犬の問題、またはペットを“生き物”として認識し生涯飼養し、またはおもちゃのように遺棄しない、虐待を行わない、などのモラルの問題も考えられる。さらに最愛のペットを失った喪失感から、精神的に不安定な状態に陥るペットロスから立ち上がれない人の問題などは雑誌やテレビなどでも多数取り上げられ深刻化している様相が分かる。このようにペットを介した人との関係性のプラス面、マイナス面は多数挙げられるが、日本においてこれらの問題に関する研究は、その途についたばかりである。

このように、「人とペット」「ペットを介した、人と人」といったペットに関わる人との関係は様々な分野で研究が進められており、今後益々盛んになっていくと考えられる。これらの人とペットとの関係を研究していく上で、今後は「コンパニオン・アニマルを介したコミュニケーション」という観点から、人と動物の相互作用で生まれる効果、さらにペットを媒介とした人同士の新たなコミュニケーションの側面を研究していきたい。

文献

- A. H. キャッチャー・A. M. ベック編、1994『コンパニオン・アニマル 人と動物の絆を求めて』誠信書房
- 安藤孝敏、1999a「ヒューマンアニマルボンド入門第8回 人とペットの関係を評価する尺度（その1）」『PROVET』November, pp. 58-61
- 安藤孝敏、1999b「ヒューマンアニマルボンド入門第9回 人とペットの関係を評価する尺度（その2）」『PROVET』December, pp. 58-61
- Gammonley, J. & Yates, J., 1991, "Pet projects: Animal assisted therapy in nursing home," *Journal of Gerontological Nursing*, 17, pp. 12-15
- 濱野佐代子、2002「人とコンパニオン・アニマル（犬）との愛着尺度」『白百合女子大学発達臨床センター紀要』6, pp. 26-35
- Johnson, T. P., Garrity, T. F. and Stallones, L. 1992, "Psychometric evaluation of the Lexington attachment to pets scale (LAPS)," *Anthrozoos*, 5, pp. 160-172
- 金子智栄子、2003「ペットが及ぼす心理的効果—飼育経験の有無による検討—」『文京学院大学研究紀要』Vol. 5, pp. 85-93

- 金児恵、金度希、2004「コンパニオン・アニマルとの愛着関係のタイプと社会的ネットワーク」『日本社会心理学会 第45会大会』、pp. 206-207
- 加藤元、1997「新しい科学：ヒューマン・アニマル・ボンドをめぐる人と動物の相互作用—国際学会（IAHAIO）と日本福祉協会（JAHA）」『日本獣医師会雑誌』50、pp. 194-197
- Lago, D., Kafer, R., M. and Connell, C., 1988, "Assessment of favorable attitudes towards pets: Development and preliminary validation of selfreport pet relationship scales," *Anthrozoos*, 1, pp. 240-254
- Levinson, B. M., 1962, "The dog as a "co-therapist"," *Mental Hygiene*, 46, pp. 59-65
- Levinson, B. M., 1962, "Pets: A special technique in child psychology," pp. 243-248, *Mental Hygiene*, 48, pp. 243-248
- 諸井克英、1984「孤独感とペットに対する態度」『実験社会心理学研究』（日本ダイナミクス学会）第24巻1号、pp. 93-103
- 新島典子、2001「ペット喪失体験（ペットロス）はなぜこんなにつらいのか リアリティ分離・封殺とペット喪失者のつらさの強化について」『現代社会理論研究』11、pp. 225-238
- Poresky, R. H., Hendrix, C., Mosier, J. E. and Samuelson, M. L., 1987, "The companion animal bonding scale: Internal reliability and construct validity," *Psychological Reports*, 60, pp. 743-746
- Russell D., Peplau, L. A. & Ferguson, M. L., 1978, "Developing a measure of loneliness," *Journal of Personality Assessment*, 42, pp. 290-294
- 桜井富士朗・長田久雄編著、2003「『人と動物の関係』の学び方：ヒューマン・アニマル・ボンド研究って何だろう』メディアカルサイエンス社
- 柴田有希、2003「アニマル・セラピーの実態および日本社会における問題点」愛知学泉大学コミュニティ政策学部平成14年度卒業論文、pp. 1-119
- Stallones, L., Marx, M. B., Garrity, T. F. and Johnson, T. P., 1988, "Attachment to companion animal among older pet owners," *Anthrozoos*, 2, pp. 118-124
- 杉田陽出、1999「なぜ人は動物とふれあうのか—人と動物のコミュニケーションを考える」『大阪商業大学論集』通号112・113 [1999.02]、pp. 737-755
- 杉田陽出、2002a「JGSS-2000とJGSS-2001のデータに見る犬の飼い主の健康状態」『大阪商業大学論集』第124号、pp. 73-86
- 杉田陽出、2002b「『子ども』としてのペットの存在性に関する一考察—同居している子どもの有無と年齢がペットに対する愛着度とペットと過ごす時間に及ぼす影響という観点から—」『日本コミュニケーション学会 第32回年次大会発表論文』、

pp. 25

Templer, D. I., Salter, C. A., Dickey, S., Baldwin, R. and Veleber, D. M., 1981, "The construction of a pet attitude scale," *The Psychological Record*, 31, pp. 343-348

山田昌弘、2004. 5『家族ペット』サンマーク出版

Zasloff, R. L., 1996, "Measuring attachment to companion animals: A dog is not a cat is not a bird," *Applied Animal Behavior Science*, 47, pp. 43-48